

「話す・聞く」力を高める

即した單元構想の工夫――

尾西 泰子 (おにし やすこ)

「話すこと・聞くこと」の音声言語は、自然に身につく

そこで、本校生徒の「話すこと」への意識調査を行った

た。その結果、約半数の生徒が苦手意識を抱いていることがわかった。その理由として、「恥ずかしい」「緊張する」「聞き手の反応が気になる」「笑われた経験がある」といった情意面での理由が目立った。これらは、聞き手側の初歩的なマナーや礼儀の問題であり、「聞く」とい

これらは、生徒たちなりの「話すこと」への苦手意識を克服するための方策（活動目標）となった。

次に、生徒一人一人に「話すこと・聞くこと」への課題意識をもたせるために、授業開きでピクチャーゲーム（直線や曲線で描かれた簡単な絵図を言葉―音声言語―で説明し、それを聞き手が、そのとおりに作図できたかどうか比べてみるゲーム）を行った。その結果、次のような「話す・聞く」力を高めるための留意点とらえることができた。

## ○筋道を立てて・内容を整理して・一文をわかりやすく

短くまとめて・重要な点を強調して・具体例やたとえの表現を使って

〈展開・構成〉

○ ゆっくり落ちて着いて・言葉遣いに気をつけて・声の大きさを発音に注意して

＜音声化＞

○聞き手を見ながら

## 〈話す態度〉

○集中して、頭の中で整理しながら・メモをとりながら・話し手を見て相づちを打ちながら・最後まで黙って・暴言を吐かないで・疑問点は質問して

このようにして、生徒たちに「話す・聞く」力を国語の力として意識させ、年間を通してスピーチを軸とした

ア 話すことが見つからない・内容に自信がない

適切な言葉で表現できない・話す順序がわからない

い・わかりやすくまとめるのが苦手へ展開・構成  
 声が裏返る・言葉がうまく出てこない・発音が悪い

さらに、「どうすれば人前で話す力が身につくと思いますか。」という問いに対して、以下のような答えが出された。

・人前に立って話す経験を多く積み、場慣れをする。

・小グループで発表して、恥ずかしさをなくす。

- ・ 話すことの楽しさを知る。
- ・ 自分の意見をしっかりとつ。

- ・自分の考えに自信をもつ。

- ・話し方の得意な人のよいところに注目する。

- ・聞き手の目を見る練習をする。

- ・鏡に向かって話し方の練習をする。

「話す・聞く」力を高めるための学習計画を立てた。それぞれの学習において、生徒がどのように目標を達成しつつあるかを把握し、指導に役立てるために評価活動を取り入れることにした。生徒は、相互評価や自己評価をするとともに、教師の評価を受け止めることで、自己学習力を高めていくことになる。生徒一人一人において適切な自己評価を行うために「自己診断カード」を取り入れることにした。その診断項目は、事前に取り

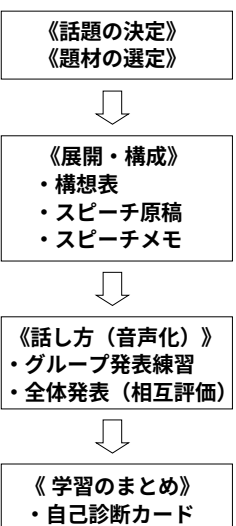
### ▲自己診断カード例

組んだ意識調査や予備実践（ピクチャーゲーム）で得られた結果（〈 〉内の項目）を基にして作成した。

## 2 単元のとらえとスピーチの学習方法

何を話題・題材にして「話す・聞く」学習を展開するかということは、極めて大事なことである。そのため、生徒の発達段階を考慮した教材開発は慎重にしなければならない。そう考えたとき、教科書の単元教材を発展させたスピーチの学習は、最適な話題や題材の選定もでき、学習内容の深まりも期待できるので有効である。そこで、各単元におけるスピーチを軸にした「話す・聞く」学習の二学期までの実践を紹介する。どの実践も学習の流れと自己診断カードによる評価活動は同様である。

### 【学習全体の流れ】



## 二年 単元一 「春を伝える」

●「春」という言葉からイメージを膨らませ、印象的な

(2) 情報源を新聞記事に限定して興味のあるニュースをスクラップし、紹介する題材を選定する。

(3) 新聞から得た題材を、5W1Hを押さえてわかりやすく要約（書くことの学習②）を参照し、さらに自分の考えや感想を加えてニュース紹介スピーチをする。

※ここでは、グループでの発表練習時にアドバイスカードによる高め合いや、発声の練習、全体でのスピーチの際の聞き取りメモによる「聞く」力の向上を図った。その結果、専門用語など語彙面での伝え方を工夫して話したり、話の中心や事実と意見との関係に注意しながら正確に聞き取るうとしたりして、話し手も聞き手も緊張感をもって臨んでいた。また、世界に目を向けるための手段であったが、新聞記事を読むことの意義も確認できた。情報を得ると同時に、「読解力」や「文章構成力」の国語力の向上につながることも実感していた。

## 二年 単元四 「古典を楽しむ」

●「日本の古典の魅力について語ろう」という話題で、「扇の的」「枕草子（第一段）」「徒然草（第十一段）」を題材にスピーチをした。

「春」のシーンを想起させて、「自分の『春』を伝えよう」という話題でスピーチをした。

(1) 教科書十七ページを参考に「春」のカードをはり出して「春のコーナー」を作る。

※新しい学級の仲間とのコミュニケーションを深めることができ、授業の雰囲気作りにも役立った。

(2) 詩教材「春よ、来い」「春に」や教科書の写真から個人のイメージ（自分の春）を広げる。

※特に二編の詩は、CDを聴かせることで曲からも季節感をとらえることができ、スピーチの際には、クラシックの曲をイメージして題材としたり、BGMとして春らしい曲を流したり工夫が見られた。一人一人のスピーチを共感し合い、互いに認め合う場の構成により、「話す・聞く」学習意欲は高められた。

## 二年 単元二 「世界に目を向ける」

●「世界のニュースを伝えよう」という話題でニュース紹介スピーチをした。生徒たちに少しでも社会に目を向け、世の中の動きに関心をもつて欲しいと考えたからである。

(1) 生徒は、教材「伝え合い」と「マドゥーの地で」を読み、筆者の体験を通して未知なる世界の状況を知る。

(1) 作品と活動形態（劇・紙芝居・現代語訳・イラスト）でグループピングし、発表する中で一人一人の作品や作者に対する感想のスピーチを取り入れる。

(2) 発表のためのシナリオを作成させ、作品の内容をわかりやすく伝える工夫をさせて、グループごとに朗読や感想スピーチを交えながら発表する。

※教科書の要所に仮名遣いや口語訳が付され、内容理解がしやすくなっているため、生徒たちなりに



場面を想像して発表できていた。また、口絵や挿絵も参考にして、場面状況をとらえたり自分たちの作品作りに役立てたりしていた。このような形態の学習活動を取り入れることで、古典を楽しむことができ、「話す・聞く」力も高められた。

この間に、読書単元の「走れメロス」を読んでスピーチの学習も実践したが、三学期に、「走れメロス」も題材に取り入れながら文学的文章を話題にブックトーク（教科書百十ページ）の方法を使ってスピーチの学習を予定している。